

n 次方程式の n 個の解の k 乗の和の求め方について

1 はじめに

問題解法代数学辞典（参考文献）の第8編 方程式の理論 第3章 四次方程式及び高次方程式 6.その他に、次の問題と解答が掲載されている。

3051. ある四次方程式の四つの根の 1 乗, 2 乗, 3 乗, 4 乗の和がそれぞれ u_1, u_2, u_3, u_4 であるという。
この方程式を求めよ。

解 求める四次方程式を $f(x) = x^4 + px^3 + qx^2 + rx + s = 0$

とすれば、微分を用いて $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \frac{4x^4 + 3px^3 + 2qx^2 + rx}{x^4 + px^3 + qx^2 + rx + s}$

そこで普通の割り算をすれば

$$4 - \frac{p}{x} + \frac{p^2 - 2q}{x^2} + \frac{-p^3 + 3pq - 3r}{x^3} + \frac{p^4 - 4p^2q + 4pr + 2q^2 - 4s}{x^4} + \dots$$

$$\therefore u_1 = -p$$

$$u_2 = p^2 - 2q$$

$$u_3 = -p^3 + 3pq - 3r$$

$$u_4 = p^4 - 4p^2q + 4pr + 2q^2 - 4s$$

$$\therefore p = -u_1$$

$$q = \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)$$

$$r = \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)$$

$$s = \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4)$$

故に求める四次方程式は

$$x^4 - u_1x^3 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^2 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4) = 0$$

2 証明

上の解答に使用されている

$$\begin{aligned} \frac{xf'(x)}{f(x)} &= \frac{4x^4 + 3px^3 + 2qx^2 + rx}{x^4 + px^3 + qx^2 + rx + s} \\ &= 4 - \frac{p}{x} + \frac{p^2 - 2q}{x^2} + \frac{3pq - 3r - p^3}{x^3} + \frac{4pr + 2q^2 - 4p^2q + p^4 - 4s}{x^4} + \dots \\ &= u_0 + \frac{u_1}{x} + \frac{u_2}{x^2} + \frac{u_3}{x^3} + \dots \end{aligned}$$

の証明を試みたい。ただし、 u_k は 4 次方程式の 4 個の解の k 乗の和を表す。

n 次方程式 $f(x)=0$ の n 個の解の k 乗の和を u_k とおくと、 $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ である。

証 n 次方程式 $f(x)=0$ の n 個の解 $\alpha_i (i=1, 2, \dots, n)$ の k 乗の和を u_k とおく。

すなわち、 $u_k = \alpha_1^k + \alpha_2^k + \dots + \alpha_n^k$

$a \neq 0$ として、 $f(x) = a(x - \alpha_1)(x - \alpha_2) \cdots (x - \alpha_n)$ とおける。

両辺の絶対値をとってから対数をとると、

$$\log|f(x)| = \log|a| + \sum_{i=1}^n \log|x - \alpha_i|$$

両辺を x で微分すると、

$$\frac{f'(x)}{f(x)} = \sum_{i=1}^n \frac{1}{x - \alpha_i}$$

両辺に x を掛けると、

$$\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{i=1}^n \frac{x}{x - \alpha_i} = \sum_{i=1}^n \frac{1}{1 - \frac{\alpha_i}{x}} \dots \textcircled{1}$$

$\max\left(\left|\frac{\alpha_1}{x}\right|, \left|\frac{\alpha_2}{x}\right|, \dots, \left|\frac{\alpha_n}{x}\right|\right) < 1$ なる十分大きい x に対して (※), ①の右辺は、

$$\begin{aligned} &= \sum_{i=1}^n \left(1 + \frac{\alpha_i}{x} + \frac{\alpha_i^2}{x^2} + \dots\right) \\ &= \left(1 + \frac{\alpha_1}{x} + \frac{\alpha_1^2}{x^2} + \dots\right) + \left(1 + \frac{\alpha_2}{x} + \frac{\alpha_2^2}{x^2} + \dots\right) + \dots + \left(1 + \frac{\alpha_n}{x} + \frac{\alpha_n^2}{x^2} + \dots\right) \\ &= u_0 + \frac{u_1}{x} + \frac{u_2}{x^2} + \dots \end{aligned}$$

$\therefore \frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ (公式) 終証

3 2の公式の利用例

n 次方程式の n 個の解の k 乗の和の求め方について、 k の値が $k = 2, 3$ くらいまでなら、対称式を利用するのが一般的で、それ以上になると漸化式を利用する求め方も知られている。しかし、次の例題なら、上の公式を使うと単純計算で求めることができる。

【例 1】 4 次方程式 $x^4 + 4x^3 + x^2 + x + 1 = 0$ の 4 つの解の 10 乗の和を求めよ。

解 $f(x) = x^4 + 4x^3 + x^2 + x + 1$ とおくと、 $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \frac{4x^4 + 12x^3 + 2x^2 + x}{x^4 + 4x^3 + x^2 + x + 1}$

分母、分子の多項式の各係数を掃き出し、次の単純計算をする。

1	4	1	1	1		4	-4	14	-55	206	-779	2951	-11176	42326	-160300	607099			
						4	12	2	1	0									
						4	16	4	4	4									
							-4	-2	-3	-4									
							-4	-16	-4	-4	-4								
								14	1	0	4								
							14	56	14	14	14								
									-55	-14	-10	-14							
									-55	-220	-55	-55	-55						
										206	45	41	55						
										206	824	206	206	206					
											-779	-165	-151	-206					
											-779	-3116	-779	-779	-779				
												2951	628	573	779				
												2951	11804	2951	2951	2951			
													-11176	-2378	-2172	-2951			
													-11176	-44704	-11176	-11176	-11176		
														42326	9004	8225	11176		
														42326	169304	42326	42326	42326	
															-160300	-34101	-31150	-42326	
															-160300	-641200	-160300	-160300	-160300
																607099	129150	117974	160300

よって、4 つの解の 10 乗の和は、607099 … 答

【例2】ある n 次方程式の n 個の解の 1 乗, 2 乗, \dots , n 乗の和を, それぞれ u_1, u_2, \dots, u_n とする。

$n=2, n=3, n=4, n=5, n=6$ のとき, この方程式をそれぞれ求めよ。

※ $n=4$ のとき, 冒頭の問題 3051 である。

解 公式 $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ を使って, 順次計算すると,

$n=2$ のとき

$$x^2 - u_1x + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2) = 0$$

$n=3$ のとき

$$x^3 - u_1x^2 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3) = 0$$

$n=4$ のとき

$$x^4 - u_1x^3 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^2 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4) = 0$$

$n=5$ のとき

$$x^5 - u_1x^4 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^3 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x^2 + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4)x + \frac{1}{120}(-u_1^5 + 10u_1^3u_2 - 20u_1^2u_3 - 15u_1u_2^2 + 30u_1u_4 + 20u_2u_3 - 24u_5) = 0$$

$n=6$ のとき

$$x^6 - u_1x^5 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^4 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x^3 + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4)x^2 + \frac{1}{120}(-u_1^5 + 10u_1^3u_2 - 20u_1^2u_3 - 15u_1u_2^2 + 30u_1u_4 + 20u_2u_3 - 24u_5)x + \frac{1}{720}(u_1^6 - 15u_1^4u_2 + 40u_1^3u_3 + 45u_1^2u_2^2 - 90u_1^2u_4 - 120u_1u_2u_3 + 144u_1u_5 - 15u_2^3 + 40u_3^2 + 90u_2u_4 - 120u_6) = 0$$

※この結果から分かることは, n 次方程式の係数は, x^n の係数を 1 としたとき, 順に

$$1, -u_1, \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2), \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3), \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4), \frac{1}{120}(-u_1^5 + 10u_1^3u_2 - 20u_1^2u_3 - 15u_1u_2^2 + 30u_1u_4 + 20u_2u_3 - 24u_5), \frac{1}{720}(u_1^6 - 15u_1^4u_2 + 40u_1^3u_3 + 45u_1^2u_2^2 - 90u_1^2u_4 - 120u_1u_2u_3 + 144u_1u_5 - 15u_2^3 + 40u_3^2 + 90u_2u_4 - 120u_6), \dots$$

であるということ。

4 補足

(※) の部分で, $f(x) = a(x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + \dots + a_{n-1}x + a_n) = 0$ の 1 つの解を α とするとき, $|\alpha| < \max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) + 1$ が成り立つことを証明する。

これが証明されると, $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ は実際, $|x| > \max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) + 1$ なる x で成り立つことに

なる。

証 $\max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) = m$ とおくと, 題意より, $m > 0$ である。

今, $|\alpha| \geq m + 1 \cdots \textcircled{1}$ と仮定する。

$x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + \dots + a_{n-1}x + a_n = 0$ より,

$$x^n = -a_1x^{n-1} - a_2x^{n-2} - \dots - a_{n-1}x - a_n$$

両辺の絶対値をとり, $x = \alpha$ を代入すると,

$$\begin{aligned} |\alpha|^n &= |-a_1\alpha^{n-1} - a_2\alpha^{n-2} - \dots - a_{n-1}\alpha - a_n| \leq |a_1|\alpha^{n-1} + |a_2|\alpha^{n-2} + \dots + |a_{n-1}|\alpha + |a_n| \\ &\leq m(|\alpha|^{n-1} + |\alpha|^{n-2} + \dots + |\alpha| + 1) \quad \because |\alpha_1| \leq m, |\alpha_2| \leq m, \dots, |\alpha_n| \leq m \text{ より} \\ &= \frac{m(|\alpha|^n - 1)}{|\alpha| - 1} \leq \frac{m(|\alpha|^n - 1)}{m} \quad \because \textcircled{1} \text{ より, } |\alpha| - 1 \geq m > 0, |\alpha| > 1 \text{ であるから} \\ &= |\alpha|^n - 1 \end{aligned}$$

よって, $|\alpha|^n \leq |\alpha|^n - 1$ となり, この不合理は $\textcircled{1}$ の仮定が原因である。

従って, $|\alpha| < \max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) + 1$ **終証**

【参考文献】

[1] 問題解法代数学辞典 (笹部貞市郎著, 昭和 45 年 5 月 1 日初版第 27 刷, 聖文社, 定価 3,500 円)

[2] 時岡郁夫の Website (<http://www.phoenix-c.or.jp/~tokioka/>) こだわり数学 11

(2014/10/19 時岡)